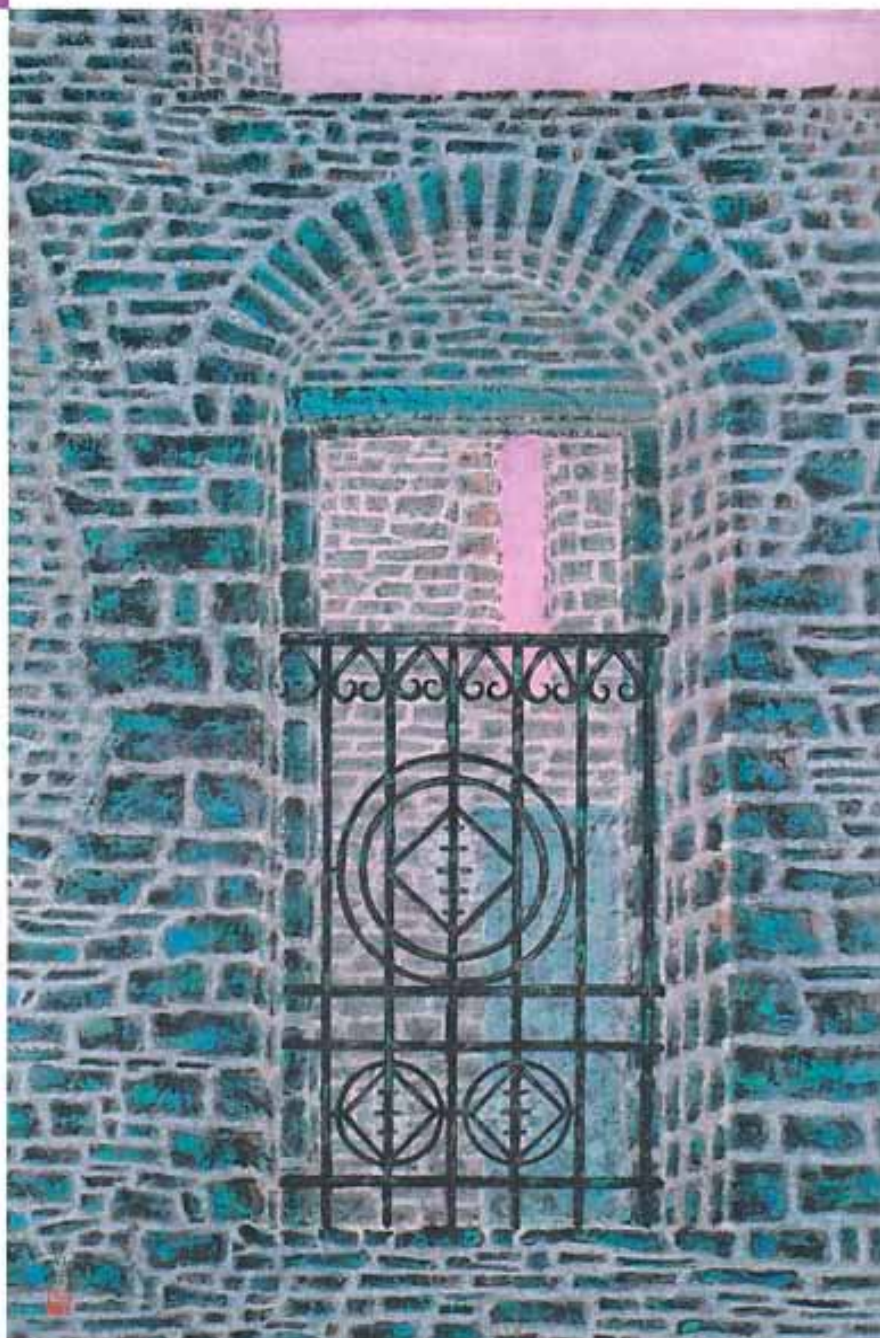


诗

6
2020

创刊周年纪念



大癡見

能村 研三

籠居享楽

止め椀の湯葉の薄味春の宵

はくれんは無垢の憂ひを裏みをり

慎みの厄^え病みの空はよなぐもり

寂々と波紋の果てや二月果つ

つつ闇の幽叙に慨く納め難

春愁の籠れる窓は嵌め殺し

朝羽振る沖波を聞く彼岸寺

捨て野火のひと煽りして起ちあがる

面箱の中はおぼろの大癡見

暮靄とも潮ぐもりとも遠干潟

緊急事態宣言が出されて、私の生活も日常とは一変した。通勤の自粛で協会には行けず、定例の句会、カルチャー教室、また各種団体の定期総会など年度始めのあらゆる行事が中止となり公用で外出することは全て無くなった。こんな状態が一月以上続くなど私の人生の中でも初めての経験である。

しかし、俳人はこんな時こそポジティブになれる人種なのかも知れない。三月からの沖の例会は全て通信による紙上句会へと切り替わった。これを世話する幹事の人たちの苦勞は大変なものであるが、通常句会の参加者数をはるかに超え、いかに多くの沖人が俳句に渴望されていたかが判って嬉しくなった。勿論一つの場所で句座を共にする醍醐味はないものの、ここは我慢するしか外はない。

沖の編集も発行所分室、印刷所での出張校正など皆が集まって作業することを止め、辻美奈子編集長の指揮のもと、それぞれ原稿を持ち帰って自宅ワークを余儀なくされていた。いつもより時間がかかることになるが、雑誌の遅延になることにはご理解をいただきたい。業務部の誌代整理、発送準備も分室で作業は中止し今月は我が家で家族と共に封筒のシール貼りを行った。昔まだ沖の体制が整わない頃、家内作業でやっていたことが思い出され懐かしかった。

私の書齋での作業も何時になく予定が捗っている。新聞や雑誌の俳句の選はほぼ同じようなペースで来ているが、沖五十周年に向けて私の句集編纂と「能村登四郎の百句」のまともにも取り掛かる時間が出来た。

また三月に退院以降、リハビリを兼ねて一日の日課で一時間位家の近くを歩くことにしている。ほぼ4、5キロは歩くことにしているが、真間川沿いや真間山弘法寺や中山法華経寺など楽しく散策する箇所には事欠かない。

ただ十月に予定している沖の五十周年大会を延期せざるを得なくなったのが辛い。一日も早い収束を皆さんと共に祈りたい。

能村 研三

(俳句「五月号掲載作品」)

岸 辺 森岡 正作

縦横に無尽に島の鶯は
 錫杖の僧行く花の吹雪きけり
 野蒜摘む地縁の薄くなるばかり
 四の五のと言ひては亀に鳴かれをり
 啄木は岸边に泣けり柳絮飛ぶ
 万歩計信じて春を逍遙す
 微睡の森に深入り春惜しむ

登四郎先生には川魚を詠んだ句が少ない。少年の頃から川漁師気取りだった私には残念に思われたが、やはり鮎は別格なのか、十句以上ある。
 例えば〈鮎買ひて家路へ心はずみつづ〉という句がある。内容は平明であるが最後の句集である『羽化』に載っていることを考えれば、少年の頃の思いつきか、さもなれば、イメージの世界かも知れない。
 そんな中にある、〈鮎突きの溜に抗す若き嗣〉という句は、鮎の鱗番にかけては誰にも負けない私の経験からも、その状況を的確に詠み捉えたものと驚く。瀬の中流の滾る流れを若者が、横向きの胴で受け止め、川底の大きめの石を頼りに足腰を踏ん張り、水中眼鏡でもって、上り来る鮎を待ち構えているのである。きつとその光景に見られて佇む先生の胸中也高ぶっていたに違いない。『合掌部落』所収で、飛驒を紀行中の作である。

飛 鷹 選 評



能村 研三

春愁の逆さに返す砂時計 杉原かほる
 砂時計は時間を測ることのできない、いわば「用のない」ものの一つともいえる。インテリアのように身近に置いたり、逆さに返すときは手遊びの玩具のようにもなる。自粛の昨今はまさに春愁の気分。自宅でどこか物憂い気分で過ごしていると、ふと砂時計など返してみたくなるのかも知れない。

収骨の箸の角張る桜冷 小倉 征子

火葬の後に行われる収骨は、厳肅な雰囲気がある。遺族や親しい参列者が二人一組になり遺骨を拾うことで、骨上げ箸は一本が竹、もう一本が白木できていて、骨上げに揃いの箸を用いないのは、逆さ事のひとつといわれている。角ばった箸を持つにも、故人を偲ぶ思いと厳肅な気持とが交錯する。

上向いて上向いて空つくづくし 石橋みどり

コロナウイルスの影響により先行きが見えない世の中を、少しでも前向きに明るく未来に向かっていけるようにと、歌手が中心となって「上を向いて歩こう」を歌う動画が公開されている。自粛による自宅での生活が続くなか、「上を向いて、上を向いて」と自らをほげましているのだろう。

明日ありと思ふ緩びに桜隠し 長山 正子

三月の下旬東京では、連日の春の暖かさから一転、桜が咲いている最中に雪が降った。満開の桜に雪が積もることを「桜隠し」と言う。今回の投句にもこの季語を使った人が多かった。桜の咲く頃の季節になると、「もう寒くなることはないだろう」とつい心に「緩び」が出てしまうが、今年は一転桜時の雪に見舞われた。

沈丁の香の中にみて木を知らず 矢野美沙子

沈丁花は春咲きの花であるのに、暗いイメージと結びつきやすいようだ。花そのものは可憐で可愛らしいのだが、暗い印象は、花を囲む葉の色が暗緑色で重い色のせいなのだろうか。ただ芳香が強く遠くからもその匂いを感じることが出来る。匂いがどこから来ているのか、木の所在を確かめたくなる。

能村登四郎の軌跡〔22〕

能村 研三

国東や枯れていづくも仏みち

『易水』平4

別府での九州大会の帰り、地元の田辺博充さんの案内で国東に立ち寄った。国東半島の中央に建つ両子寺は天台宗の寺院。海へ向かって放射状に谷が伸びこの地形を利用して六つの里が拓かれ、たくさん寺院が建てられている。両子寺はその中心の役割を担っている。国東にはいたるところに磨崖仏が見られ、その道は狭い。私も坂巻純子などと一緒に同行したが、初冬の肅条たる野を分けて曲がりくねった道を走りながら、その景色に見入った。平成十二年、両子寺にこの句の句碑が建てられ、除幕式には登四郎も出席した。

湯豆腐の天々たるを舌が待つ

『易水』平5

平成五年句集『長嘯』により日本詩歌文学館賞を受賞。句作にも一層意欲的になった。登四郎はあまり好き嫌いがなく湯豆腐など鍋物の時は私たち家族と団欒を囲むことがあった。さっぱりした湯豆腐は登四郎の好物の一つであった。天々は「詩経」の言葉で若々しいという意味だが、浮き上がったばかりの豆腐を待つのは舌だという。林翔氏が「才能に年齢が加わっての収穫」と絶賛した句。俳句総合誌に八十八句を発表したうちの一句。「食べ物は美味しく詠まなければ」は常日頃から弟子たちへの言葉であった。

匂ひ艶よき柚子姫と混浴す

『易水』平5

日野草城の句に「白々と女鎮める柚子湯かな」という句がある。生々しい女体を直截に詠んだものだが、登四郎の句は匂ひも艶もよい柚子を姫に見立て、混浴気分になったという老いの遊び心がある。小澤克己は「放下、という言葉でよく語られる作者の心境を（中略）〈古い〉に染まらず〈古い〉に陥ることもなく、今ある自分の『存在感』を温もりのある言葉で、しかも生理作用のように自然に生み出している」と語る。齢を重ねますます多作、かつ旺盛な作品活動を展開し「老艶」と言われた自在の境地の句として評されている句である。

跳ぶ時の内股しろき墓

『易水』平6

この句も「老艶」とも言われる自在な境地の句である。最初にこの句が発表された時は正直言ってドキッとした覚えがある。上五、中七と読んでいき、下五でどんな展開になるのかはらはらさせるが、ここは読者を意識しての遊び心があるのかも知れない。墓の正面の姿は薄気味悪いが、その裏側のお腹の方は真っ白で確かに跳ぶ時の足も白いはずである。内股を俳句で詠むとするならば大抵が人間でその大方は美しい女性で妖しくも艶やかなはずなのだが、その主体を墓としたことの見事な裏切りが句を面白くさせた。



蒼茫集



こころの帆

千田百里

抜きん出る

辻美奈子

手酌しておぼろを汲むに相似たる
馬酔木咲く李白は水辺にて酔へり
一糸纏はぬスーパームーン春の宵
こころの帆掲げ海市を目差すかな
志村けんに笑うて泣いて春の暮
* 窮屈な止り木惜春に叶ふ

太古の響き

林昭太郎

影を豊かに

甲州千草

海面に朝の張力つばめ来る
春愁を形にすれば阿修羅像
桜貝濡れては色をとりもどす
若葉より若葉へ雫雨あがる
しんしんと効く湿布葉新樹の夜
* 朧の夜海に太古の響きあり

遠き日の写真半眼さくら満つ
別々に飛ばす風船すぐ並ぶ
潮まねき海のリズムを背にしたり
春の蚊の即かず離れず頸周り
春昼の音を生み出すスूप鍋
* 一木の影を豊かに営巣期

あらせいとう

大沢美智子

* いつまでも暮れぬ夕空花ミモザ

情書だけし様
* 朧おぼろ歌ひ上ぐかに速夜経
あらせいとう海女のほまちの岬畑
忘れ潮砂に流れて砂に消ゆ
縞青き膳のさよりや安房泊
コロナ禍の鎖国めく街春灯
檻のライオンくるりと背く春の昼

その先の

栗原公子

* 紋白蝶おろしたてなる翅ひろぐ
その先の大海知るや花筏
胸中に持てあます闇花ミモザ

鳥声を透かす絵ガラス夏近し
桜まじ町より消えしランドセル
ただならぬ世を鳴き交はす鳥の恋

もぐる

菊地光子

菜の花や艇庫にカヌー積み上げて
海女もぐる足裏に視線あつめては

* 夏立つやコップにもある水平線
夜の薔薇卓の柁目の美しき
だんだんと柵田ひろがる帰省かな
田水張り谷間に海のあるごとし
烏賊干すや隠れてしまふ父祖の島
耶穌名聖ルチアアてきばきと毛虫焼く

花明り

宮内とし子

うつし世を鎮め賜へり春の雪
* 武蔵野の空は鈍色鳥の恋
森の日を受けむ片栗反り返る
花明り僧侶ふんはり座りをり
声変りしてより無口花は葉に
横着な猿の喚声遠足子

潮鳴集



ザビエルの胸

平松うさぎ

*花吹雪てふ優しさの吹き溜まり
舩挿すや湖は鳥居の脚洗ひ
ザビエルの胸に翼よ鳥帰る
着信音消して朧をすれ違ふ
銅鐸の溝の鈍色凍返る

花おぼろ

大矢恒彦

花おぼろ羅漢のだれぞ囁ける
夜桜の散るや微熱のあるごとく
*言霊は書かねば消ゆる石鹼玉
蝌蚪生まれ水の胎動始まり
球を打つ音透きとほる木の芽風

花 筏

関根 揺華

*歳月に沸点のあり桜散る
雲を追ひ雲を従へ花筏
長生きの秘訣ざる耳万愚節
蓬摘むきれいな耳の容して
陽炎を出て現身をとり戻す

海女の昼

埴 誠一郎

黄沙来る天に鎧戸無かりけり
*おほどかに乳含ませる海女の昼
春日燦うつらうつらと風見鶏
むらさきに筑波嶺けぶり雁帰る
余花の冷え空欄目立つ予定表

沖作品



能村研三選

万葉の人も摘みしか蓬摘む

市川市

杉原かほる

練飴の白濁掬ふ花曇

春日野の東塔跡や遠霞

千葉

長山 正子

清明や風の真中に海ほたる

*明日ありと思ふ緩びに桜隠し
春の雪白肅の首都を鎮めをり
一本桜数百年の世を見入る
料峭や散歩をせがむ母のゐて

*春愁の逆さに返す砂時計

*沈丁の香の中にあて木を知らず

水郷に立つ陽炎の丈余かな

福岡

小倉 征子

綿雲や遍路の通ふ棚田道

*春光を裂きて離陸機一直線

市川市

矢野美沙子

残り鴨こゑを尽して羽搏ちけり

真間川の今昔知るや花筏
白濁の湯に身を委ね花明り
のどけしや路面電車の発車ベル

きのふより花冷ゆるぶ葬りかな

*若布干す千々に光れる波寄せて

*収骨の箸の角張る桜冷

熊本

石橋みどり

人類にコロナの試練冴返る

*一湾の波静かなり春夕焼
雪やなぎ荒ぶる風をやり過ごし
てのひらの鶯餅のこゑ聴かむ

*上向いて上向いて空つくづくし
天を指す土筆ひとつにある力
春光や美しき心にしてしまふ

宮下 桂子